

## ラプンツェルの髪は黒？

吉田 優子

「ラプンツェルはまるで金を紡いだようなみごと長い髪をしていました」えっ、金を紡いだようって、ラプンツェルは金髪だったの？

おはなしのグループに入って初めての勉強会で、一人の方が『ラプンツェル』を語り始めました。あっ、このおはなし、知っている、と思うと同時に、子どもの頃読んだ本の表紙やさし絵がふわっと頭に浮かんできました。

小学校の3年生か4年生の頃だったかと思うのですが、毎月か隔月だったかはっきりしませんし本のタイトルも覚えていませんが、一冊に10話ほどでしたか、世界のおはなしが載った本が定期的に届きました。楽しみに待った本が届くともうすぐ読みだして、夕ご飯を食べる時間も惜しんで読み耽りました。そして次の本が届くまで、毎日のように繰り返し繰り返し読んですっかりおはなしを覚えてしまうほどでした。

その本の中には、『ルンベルシュティルツヘン』だったか『トム・ティット・トット』だったか、藁を紡いで金にするおはなし、タイトルは違っていましたが『北風に会いにいった少年』、いくつかの国に同じようなおはなしのある『三つのねがい』など、今テキストを頼りに覚えて語っているおはなしがいくつも入っていました。『ラプンツェル』も入っていました。12歳のラプンツェルの髪の長さが高い塔のてっぺんに近い窓から地面に届くほど長いことに驚き、その髪につかまって人が塔に上って行けることにも驚きました。たまたま、生まれてから一度も髪を切ったことが無く伸ばし続けている友人がいました。でも10歳当時その髪の長さはウエストあた

りまでしかありません。これが後2年で高い塔の窓から地面に届くほどにまで伸びるの？一本の三つ編みにしていたその髪で重いものを持ち上げることができるの？と、その友人の髪を見る度に不思議に思っていました。その友人とは高校まで一緒でしたが、そのまま伸ばし続けた髪はお尻までしか伸びず、それまでも毎日きちんと編まれていた三つ編みの先っぽは習字の細筆ほどに細く、重いものを持ち上げるなんて、とてもとてもできそうにありませんでした。高校生の頃にはラプンツェルのことはすっかり忘れていましたが、大人になって語りと出会ってラプンツェルに再会して、小学生の頃の気持ちとも再会して、懐かしいやら可笑しいやら、こんなことまで思い出しました。

本の中にどのように書かれていたかは思い出せませんが、長い髪の印象の強さからラプンツェルの髪と友人の髪が結びついてしまったのでしょうか、私の中ではラプンツェルの髪は友人と同じ黒髪になってしまったようです。加えて、その頃流行っていた百人一首では主に坊主めくりをして遊んでいましたが、絵札のお姫様の絵も私の中に黒髪のラプンツェルのイメージを定着させる一因だったかも知れません。

『ラプンツェル』は、主に3年生から6年生の子どもたちに語っています。ディズニーのアニメーションを観たことのある子どもも多く、『ラプンツェル』と言うと、「知ってる、知ってる」の声が上がります。ところが、語り始めると、アニメではラプンツェルはお姫さまで塔から救い出す男の人は泥棒と言う設定ですから、「違う」とひそひそ声がそこから聞こえてきます。そんな子どもたちに「そうだね」と目で語りかけて、おはなしを進めていきます。すると、いつの間にかザワザワは消え、どの子も息をのんでおはなしに惹きこまれていきます。長い年月語り継がれてきたおはなしの力を再認識すること度々です。

(よしだ ゆうこ)

## 特別支援学校の子どもたちとの読書活動

～子どもたちの笑顔に支えられ～

佐藤 涼子

子どもは、自分を育てる力を色々な読書を通じて身につけます。以下に詳しくご紹介いただく「おはなしの会 うさぎ」の数々の実践は、子どもにも大人にも貴重な道標です。

### (1) 「おはなしの会 うさぎ」の誕生

私が所属している「おはなしの会 うさぎ」は、東京都立墨東特別支援学校で読書活動を行っています。学校のある江東区と近隣4区から通う肢体不自由・病弱の小学部（小学生）から高等部（高校生）の子どもたちが在籍し、車椅子利用の児童・生徒が約85%、見え方や聴こえ方、発達にも課題を抱えています。

都立墨東特別支援学校は東京都の指定を受け、2012年から3年間「言語能力向上事業」に取り組み、担当教諭の尽力で図書館整備と外部専門家による読書活動をスタートさせました。後者の活動のため「おはなしの会 うさぎ」が誕生し、やがて活動が認知され、2014年度からは「おはなし会講師」として謝礼をいただくことになりました。現在のメンバーは、当校の教師が2名で学校との調整役、実践者は4名で、文庫や図書館経験の長い者たちです。

### (2) 児童図書館員としての学びと経験に支えられ

実践者の4名は支援学校での読書活動は初めてで、当初は子どもたちの反応が良く掴めず、毎回大いに悩み必死でプログラムを考えました。小学生から高校生までの様々な課題

を抱えた、また、「準ずる教育課程」、「知的障害を併せ有する児童・生徒の教育課程」、「自立活動を主とする教育課程」に分かれて学ぶ児童・生徒の読書要求と向き合った柔軟な活動が必要でした。そのため、児童サービス全般の知識と実践経験を総動員し、読む、語る、歌う、触れ合い遊び、演じる、科学遊び風、参加型、ブックトーク、アニメーション等々、児童・生徒に応じて、これならと思われることは何でも行ってきました。

私は長年児童サービスに携わってきましたが、図書館現場にいた時、こんな風に児童図書館員としての総合的な力を試される機会はあまりありませんでした。若い図書館員の方たちには、ぜひとも様々な子どもたちの現場に立ち、具体的な活動をして欲しいです。それが確かな専門性と子どもを見る目を培ってくれます。

特別支援学校での読書活動は、各地で実践されていても交流が

無く、参考になる実践報告やテキストをほとんど入手できなかった経験から、5年間の活動の報告集、『おはなし会がはじまるよ—特別支援学校（肢体不自由校）での図書館活動—』を2017年に発行しました。なお、この冊子は東京・教文館のナルニア国で販売していません（販価500円）。

### (3) 子どもたちと教職員とともに作り楽しむ「おはなし会」

「おはなしの会 うさぎ」という名前は、『あ



『おはなし会がはじまるよ—特別支援学校（肢体不自由校）での図書館活動—』編集・発行「おはなしの会 うさぎ」／2017

かちゃんのうた』(松谷みよ子/ぶん いわさきちひろ/え 童心社)に載っている「うさぎ」から、名付けました。子どもたちが耳を伸ばしていろいろなお話を楽しんで欲しい、私たちもしっかり耳を伸ばして子どもたちの声を聴きたい、との願いもこめました。言葉を発せない子どもが廊下で会った時に、両手を頭につけてうさぎの真似をしてくれて、この名前で良かったと心から思いました。



そんな風に、子どもたちがおはなし会を楽しみにしている姿から、教職員の方たちからの信頼も得られるようになりました。児童・生徒と教職員と私たちが楽しめる「おはなし会」、これが私たちの目指す「おはなし会」です。特に、先生の積極的な参加は、子どもたちの表情をぱっと明るくさせます。「おはなし会」の内容や子どもたちへの対応についてアドバイスをお願いし、疑問に思ったことをお尋ねする関係づくりもできてきました。

教育の力に改めて感動させられることも多いです。学校という場で拓かれていく子どもたちの感性を大切に、私たちは、いただいた「おはなし会」の時間を、でき得る限り楽しく、そして子どもたちの様々な関心と好奇心に応えるよう、「継続は力なり」を合言葉に、魅力的なプログラム作成を心掛けています。おはなし会の後、プログラムと感想を学校に送り、先生方からの感想も送ってもらいます。今年度は教師との研修会も2回開催できました。

#### (4) 子どもたちと向き合うプログラムと実践

発語ができない児童・生徒が多いため、まずは子どもたちの感情表現をよく見て、理解するよう努めます。同じく手を動かしても、絵本に触りたいのか、ページをめくりたいのか、楽しいからなのか、先生からの言葉も頼

りに思いをめぐらします。また、季節を感じ、実物に触れてもらいたいと、アレルギーにも注意しながら、ドングリや落ち葉や、果物や野菜などを持参して、触ったり匂いを嗅いでもらったりもします。楽器も使い、子どもたちが五感を使って楽しめる工夫や展開を試みています。不足の場合は制作するようにもしています。

絵本を読むときは、課程にもよりますが、5人いたら5回読むことになり、子ども達一人一人の障害に応じた見せ方や読む速度などを考えます。この実践は、私の場合、特に保育園での活動に変化をもたらしました。子どもの側に立って「おはなし会」を構成する視点が、ここでの活動を通じて今まで以上に身に備わったように思います。定番と新しいプログラムの模索もしていますが、関わっている子どもたちにわかりやすく楽しい絵本はなかなか無く、また、選定も難しいのですが、科学系の絵本やポップアップ絵本、紙芝居なども活用しています。

活動当初の頃と大きく違ってきたのは、私たちが頑張るのではなく、子どもたちや先生方とともに楽しい時間を作ろうと考えられるようになったことです。そして、子どもたちの笑顔さえあればどんなことでも大丈夫、めげずに次のステップを模索していけばいいのです。

#### (5) 今後の課題

今後の課題は、学校図書館の充実と学校司書の配置です。それを基盤に私たちの活動もより広がり深まっていきます。現在仲間の一人が「学校図書館支援員」として、月に数回働いていますが、都立の学校に学校司書をぜひ配置して欲しいです。近隣の公共図書館からの支援も可能になり、新しい年度も子どもたちの笑顔を励みに、楽しい活動を目指していきます。

(さとうりょうこ：子どもと読書のコーディネーター)